

市長が行く

釜石「被災者支援フォーラム」に参加して

No.78

茂原市長 田中豊彦



2月7日に岩手県釜石市において、「被災者支援フォーラム」が開催され、茂原市も招待を受けて、参加してまいりました。これは、東日本大

震災時において、避難所運営活動などの支援を行った民間の団体等を顕彰するとともに、「人、地域のつながりの大切さ」を再認識する機会として、開催されました。

5年ぶりの被災地は、復興も徐々に進んでいるようでも、平成29年には復興住宅も8割がた出来る上とのことでした。500人以上の犠牲者が出た鶴住居地区（うづまい）も、2019年に開催されるラグビーワールドカップの会場として大きく変貌しようとしていました。フォーラムの式典では、茂原からの支援物資は、迅速でなおかつその時に、本当に必要なものを確認して送ってくれたと、改めて感謝の言葉が伝えられました。被災直後、行政だけでは、充分な支援がいきわたらなかつた部分を、

民間の力にかなり助けられたこと、そしてその民間の方たちへの援助として、茂原からの義援金の一部を使わせていただいたとのことでした。

釜石市の野田市長は当時を振り返り、共助の支えがなかつたら、さらに多くの犠牲者が出たかもしれないと述懐しておられました。私も改めて、行政や民間の枠を超えた、人と人が互いに助け合うことの大切さを、感じさせられました。

さらにフォーラムでは、「市民による市民のための被災者支援のあり方」というテーマで、3人のパネラーによる災害直後の生々しい体験談を聞くことが出来ました。「大きな津波なんか来ないよ」と言って自宅に居座るお年寄りをお孫さんが無理やり高台に避難させて助かった例、民宿のオーナーで栄養士の資格を生かして大勢の人達を受け入れ食事の手配をした方の話、消防団員が次々と運んでくる

被災者の手当てをした歯科医院の先生の話、どれをとってもその時の状況を鮮明に蘇らせるものでした。このようなフォーラムに参加して、私は、茂原からの支援が生かされ、大きく花開いたように感じました。

また、フォーラムの前に、正月に兵庫県西宮神社で行われる福男選びを模して、高台にある仙寿院というお寺まで全力疾走で駆け抜ける韋駄天競争が行われました。津波が来た場合を想定して、「津波が来たら早く」の由来のように小学生から大人まで全力で駆け抜けていく様子からは、「津波なんかには負けないぞ」という強い気持ち伝わってくるような気がしました。またこの仙寿院という寺は、明治25年に当時の茂原の藻原寺の貫主（ぬきぬし）荒居養壽師が釜石市の法華信者から招聘されて開設したものと聞き、ここにも不思議な縁を感じました。